二月心光寺定例聞法会のご案内

＊期　日　平成十四年二月十六日（土曜日）
＊時　間　（昼席）午後一時三十分より　（夜席）午後七時より
＊会　場　（昼席）心光寺本堂　（夜席）心光寺庫裏
＊講　師　大石　法夫　先生（広島市在住）

心光寺からの便り

立春も過ぎ、境内の木立の枝先にも日毎に春の兆しが感じられるようになりました。寒さの峠をようやく越え、日一日と芽吹きの季節へと向かう、恢復（かいふく）期にも似た喜びを静かに感じています。

皆様つつがなくお過ごしでしょうか。

さてしばらく前のことになりますが、ある方から次のような相談を受けたこ

とがあります。それはその方がふとしたことから人の縊死（首をくくって死ぬこと）した姿を見てしまい、それ以来その姿が胸にひっかかって心が重い…という内容のものでした。

私はその時その方に次のようにお話ししました。「あなたは首をくくるほど追い詰められたその人の人生が人事と思えないから気にかかっているのですね。だからその人の問題を自分の問題として尋ねていこうとしているのだと思います。気にかかるというのは、そのことを促されているということだと思います。」と。

その相談を受けたのは、仏法のある研修会の席で法話が終わった直後のことでした。ちょうどその日法話の中で、「世間では人生に失敗して破綻すると生きる道がなくなる。ところが念仏の道ではそこが入門となる。」という内容のお話があったばかりでした。そこで私はそのお話を引き合いに出しながら話を続けました。

首をくくるということは、人生に破綻して生きる途がなくなったということです。常識の世界から言えばそこでもう人生は終わりです。ところが念仏の道ではそこからが出発点になるのです。人生には色々困難な出来事に出くわすことが多々あります。時にはもうこれまでと思うこともあるでしょう。ところが我々が終わりだと思う所が実は出発点だと――そう言える世界があるということは、もうこれで人生が終わりと思っている者にとってはとても大きな救いです。人生の様々な出来事を通して、絶えずそのような出発点をいただいていく。そのような出発点に立ち返っていくことが大切だと思います…と。

実はその日の法話で、私が最も感銘を受けたのもそこのところでした。それでその時の感銘もこめて、そのようなことをお話ししたのを覚えています。

大石法夫先生のご著書の中にも、

「全ての考えが行き詰まったところに聞こえるのが仏のみ声、南無阿弥陀仏です。」

（『許されて生きる』二三五頁）

というお言葉があります。或いは藤原正遠先生が遺された歌にも、

「いずくにも　行くべき途の絶えたれば　口割りたもう　南無阿弥陀仏」

と詠まれた歌があります。

ところでこのようなお言葉に似たものとして、「どうにもならないので念仏申すしかない」という言い方を聞くことがあります。しかしこれは大石先生や正遠先生のお言葉と、似ているけれども本質的に違うように思います。このように言われる場合の念仏は、私が取り得る最後の手段ということになります。それも他の手段がだめになって、残ったのはこれしかないという消極的な位置付けです。

しかしお二人の先生が明らかにして下さっているのは、念仏はそのような私の行ではないということです。私の側からのあらゆる試みが破綻し、尽き果てた所に、仏の方から名告り出て下さったもの。念仏それ自ら口を割って出て下さったもの。それが南無阿弥陀仏です。

久遠劫来迷ってきた私の迷いの元凶は何かといえば、それは私の自力心です。なぜそれが迷いの元凶かといえば、その自力心の元には、自分という枠の中に閉じこもってどこまでもそれに固執する心があるからです。唯識教学（人間の深層意識の闇を解明した仏教の教学）の教えるところによれば、この心が我と人を峻別し、この我のみを盲目的に愛しているのです。理由もなく、理屈もなく、ただ自分のみをひたすら貪るよう

一月に行われた心光寺定例聞法会の夜の座談会で、大石法夫先生のお話に熱心に耳を傾ける出席者の皆さん方（H14.1.16.心光寺庫裏にて）

に愛しています。そういう底無しの強烈な自我愛。仏教で《我愛》と呼ばれる心があります。わかりやすく言えば、自分さえよければよい。他はどうなってもよいという心です。この心は自分以外のあらゆるものを、自分を守り増幅する為の手段にしていきます。最後には「もう念仏しかない」というかたちで、念仏さえも自分を守る手段にしていきます。どこまでいってもきりがありません。この心こそ私の迷いの元凶です。この心から開放されない限り私に救いはありません。

ではこの心から解放されるには一体どうしたらよいか。ところがこの心から解放されようとすることが、もうすでにこの心の仕業です。自力を捨てようとする心が一番の自力です。ここに至ると、もはや自分の中にこの心から解放される術（すべ）を見出すことはできません。いかに力持ちでも、自分の座っている座布団（ざぶとん）を自分で持ち上げられないのと同じです。

このジレンマから抜け出す道が果たしてあるのか。実はその道を指し示して下さっているのが、前述のお二人の先生のお言葉なのだと私はいただいています。

「全ての考えが行き詰まったところ」――そこが自力の限界点のところです。「いずくにも行くべき途の絶えたれば」というのも同じです。その限界点のところで、私ならぬ「仏のみ声、南無阿弥陀仏」に出会うのです。つまり念仏は最後の手段として私が称える行ではなく、仏のみ声として、仏の方から、全ての考えに行き詰まった私のところに届いてくるものです。聞こえてくるものです。そこに私の力の介在する余地はありません。私の予測やはからいの向こうから、私を押し開くようにして私の中に入って来るものです。仏様が私に向かって「南無」と合掌し給う、そういう仏様の「南無の心」が私に届くのです。私の中に入って来るのです。それを「聞こえてくる」と表現されるのです。或いは「口割りたもう」と表現されるのです。私が称えるのでないから、「たもう」と敬語を使っておられます。念仏の主語は念仏それ自らです。南無阿弥陀仏自らが「南無」と名告（なの）りを上げるのです。私の中で…。

念仏は本願の名告り、本願の顕現です。従って念仏を称えてそれからどうかなるというのではなく、念仏申すことそれ自体に完全な救済があります。念仏申すことそれ自体の中に私の破闇満願（はあんまんがん）（私の闇の根本が破られ、私の願いの根本が満たされること）があります。そこに今までの我に死んで、新しい我に蘇（よみがえ）ると

いう一大事が成し遂げられるのです。ここに私が人間として生まれてきた大事が畢了（ひつりょう）される（完全に果たし遂げられる）のです。従って念仏申すということは、「念仏申すしかない」というようなら寂しいことではなく、そこにこそ新生の喜びがあります。そのような世界のあることを、お二人の先生のお言葉は私に告げ知らせて下さいます。

ではその場合、前述した私の《我愛》の心、自力心はどうなるのでしょうか。それはやはりどうにもなりません。けれどもただどうにもならないということがはっきりするということがあります。それが大きいのです。そのことがはっきりすると、それをどうしようこうしようという心から解放されて、我が心の姿をそのままに静かに見ていこうとするものが生まれます。私の全体をそのままに置けるということです。そうすると憑（つ）き物が落ちるように、不思議にもその呪縛から解放されるようです。

そして我が心の姿はそれとして、どこまでも私の中に届いた如来の「南無の心」に促されて歩んでいこうと。そこに私の道がある。そこに私の全生涯を投げ出しても悔いない道がある。この道こそ如来から賜った道である。この道を歩んで行こうと――そのような我を超えた決意が発起してきます。南無阿弥陀仏に促されての歩み、生活です。そのような新しい生活が始まります。一歩一歩の歩みです。

大石法夫先生はそのような世界を身を以って私共に教えて下さいます。長い間の苦心を経てこの世界に転入され、ご自身を凡夫往生の実験者と告白されながら、縁ある人々にこの世界を告げ知らせるために命を投げ出して、今日も今日もと願生浄土の旅を続けられる念仏者、それが大石法夫先生です。

まだまだお寒い時ではありますが、寒風を突いて、どうぞ勇んでこの貴重な聞法の場に足をお運び下さい。心よりお待ちしています。

南無阿弥陀仏　　文隆拝

平成十四年二月九日

摂取山　心　光　寺